

おんなの世渡り

上坂冬子

んなの世渡り



文藝春秋

著者紹介

1930年東京に生まれる。1949年愛知県豊田東高校卒業。OL生活13年を経て評論家として独立。歯に衣着せぬ発言と軽妙な文章でテレビ・雑誌等で活躍。著書に「何とかしなくちゃ」「銀座ゆうゆう人生」等多数。

おんなの世渡り

昭和四十九年四月二十五日 第一刷
昭和四十九年十一月三十日 第三刷

著者 上坂冬子

発行者 阿部亥太郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二二一
郵便番号一〇二

印刷 大日本印刷
製本 中島製本

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

目次

女ひとりマイホームを買う

7

あき巢ドロ騒動始末記

24

お手伝いさんからの三下り半

41

独り暮しで大病すれば

58

ハイミス小姑と六人の嫁たち

76

わがマンションは定員一名

93

評論家商売も楽じゃない

110

一パツかませるオシヤレ論

128

“わが思い出の君”のその後

145

海外旅行と行きずりの恋

163

わが誇り高きケチ精神

180

喧嘩こそわがレジャー

198

中年女の交際範囲

218

*

わたしの求婚宣言

235

装帧 柳原良平

おんなの世渡り

女ひとりマイホームを買う

三十五歳は決意の時

三十五歳というのは、女にとってある決意の年ではなからうか。

私の友人で、若い頃、一度結婚に失敗した人は、たいてい三十五歳で再婚にフミ切っている。さいきん主婦の再就職がひそかにひろまってきているが、これも三十五歳ぐらいの主婦が少なくない。

さて、私は三十五歳の時、しきりに「家」がほしい、と思った。

なぜか分らないが無性に家を買いたいと思った。

それまで、仕事場をかねてアパートぐらしをしていた私が一軒の家に住みたいとねがったのは、やっぱり三十五歳というのが女にとってある決意を迫るトシだったからだろう。夫なし、

恋人なし。女ひとりガムシヤラに生きてきた私にとって、そのころの唯一のたのしみといえば、夜中に貯金通帳を眺めてニーツと笑うこと、であった。

いや、別に番町皿屋敷みたいな趣味ではないのだけれど、原稿をかき終え、ほっと一息ついて収支決算にかかるとうとうしても夜中になってしまうのである。その年の冬、バチバチとソロバンを入れながら月末の帳尻をあわせたあと、何気なく本箱の小ひき出しから定期預金の証書を取り出してならべてみると、何と三百五十万ほどあるではないか。

ウム。私はわが細腕をさすりながら、あの土地を売って、このお金と合わせれば家が一軒買えるかもしれないと考え、そう考えるやいなや、にわかに一戸建の持家が目の前にせまってきたのであった。

さて、家を買うにはどうしたらいいか。私は身の上相談の相手としてまずアパートの管理人のところへかけ込んだ。管理人は好人物の中年夫婦で、実は前述の「あの土地」というものの夫婦と関連がある。ご主人は自動車修理工、奥さんは煮込みうどんを上手につくる愛想のいい人で、この夫婦が、あるとき私にゼットイ儲かる話、として土地をすすめたのだ。ご主人と懇意の植木屋の口ききで、神奈川のお奥だけど鉄道がひけるから、まちがいなく値が上るといふ。たしか百坪で七十万ほど私は払い込んだ。

さて、管理人夫婦の部屋にベッタリとすわり込んだ私は、まずあの土地はいくらに値上りしたろうか、とぎり出した。

「そりゃ、二パイにやなってる。五年もたったもの。ドンドンバン押すよ」

親父さん、それをいうなら太鼓判よオ、と私は嬉しさのあまりキャッキヤと笑いながら、「ときに親父さん、家を買うにはどうしたらいいの？」

とつづけた。

どうしたらいいのって、大根なら八百屋、めざしは魚屋、家買うなら不動産屋だわな。しかし不動産屋にはワルいのがいるからなるべく目つきのいいのを選べよ、と修理工氏は教えてくれた。

一 やっと見つけた木造二階建

貯金が三百五十万。土地がもし本当に二パイに値上りしていたら百四十万。これ売って合わせれば五百万近い額になる。よしッ、私は思いついたら立上りは早い。翌日から町をほつき歩き、ガラス戸にベタベタと物件の貼ってある不動産屋をしらみつぶしにたずねまわったのである。目ざす五百万台の家は三軒目の不動産屋にあった。

「美邸、築一年。鉄門つき。国鉄蒲田駅徒歩七分。土地四十坪付」

「コレッ!」ととびついて戸をあけると、白髪頭のいかにもやり手そうなバアさんが奥の座敷であんまに腰をもませている。そして目がね越しにジロリと私をべつするや、横になったままの姿勢で、

「ああ、その四十坪土地つきのネ。昨日話がついちゃったの」

これが、不動産屋の手であつた。人の気をひきそうなのをおもての戸に貼りつけて、じゃ、これを、と言うと、たった今売れたと言いながら別の物件をすすめるというのは、不動産屋のよくやる手なんだということが、六軒まわつてみてようやく私には分つた。

何たることだ。不動産といえは誰しも全財産を賭けて買うしろものである。その売買がこんな原始的な個人商店に任されていいものか。政府は一体何やつトルカ!

憤慨しながら途方にくれ、やぶれかぶれで七軒目の戸を叩くと、年の頃六十がらみのじいさんが口をへの字に結んで私を見上げた。

「あのウ、五百万くらいで一戸建を……」

恐る恐る言うと、じいさんはこっくり頷いて少し古いけど日当りのいい掘出し物があると答えた。

ワーツ嬉しい。実はじいさん私は女一人、全財産はたいて今、終の住処すゝかを探してンのよ、協力してね、ダメさないでね、ボラないでね、と、今にものどをついて出てきそうな言葉を私はぐっとカミ殺しおもむろに言った。

「主人は来年春まで外国に出張しています。帰国までに家を買っておくように任されてますんで、よろしく」

女一人、足モトをみられてたまるか、という苦肉の策である。

じいさんの案内で現場へいくと、なるほど自由が丘駅前から歩いてほんの三分、川に面した木造二階建は、さえぎるものもなく一ぱいの陽を受けている。ドアをあけて中を一巡して私はキメタ、と思った。たしかに古い。古いといつてもいつそ戦前の家なら良い材料が使っているのだけれど、終戦直後のものらしく、柱も天井も一目みて駄物とわかる。

にもかかわらずキメタ、と思ったのは間取りであつた。まず、玄関を入るといきなり階段がある。つまりどの部屋も通らずに二階にいけるのだ。二階は三部屋。それがどういうわけか全部壁で仕切られており、おまけに、二階にガス、水道、トイレがある。この間取りなら貸せると私は思った。女一人、万一のことがあつても二階を貸間すれば、食べていけるではないか、少なくとも国民年金よりもこの方がアテになる、と私は判断したのだ。現に私の知人でご主人

と事情があつて別居し、二階に学生を置いて二食つきの下宿屋をしながら子供を育てている奥さんがあり、私は無意識のうちにその人を思ひうかべていた。階下はオンボロで、おまけに奥の間は暗く台所の流し台は傾いてガス台には油がこつてりついている。売り主は三十がらみの明るい奥さんで、

「持病のゼンソクの治療のために転地したいんですよ。それに二階におばあちゃんが住んでるんで、ここを売って、辺鄙なところへ二軒買つて、おばあちゃんと別居したいの」と、詳しく事情を話した。

大銀行に調査を依頼

さて、目標は決った。これをどうやって攻めるか。まず第一のテーマは、この物件が本当にたしかなものであるかどうかであつた。買つてみたら抵当に入つていたとか、バカに安いのでとびついたら、区画整理で家を取りこわさなければならぬ場所だったとか、もっとひどいのは、文書偽造で、インチキ商品だったなんてことも人の噂で耳にしている。

ちようどそのころ、私はM信託銀行からの依頼で講演に出かけた。信託銀行に着いて何気なく見ると「不動産部」と札が下つてゐるではないか。おお、これぞサバクのおアシスとばかり

私は講演もそこそこにして、早速、部長さんにこちらの事情を話し、何とか、この物件の素姓をしらべてもらえないものか、ときり出してみた。もちろんそれなりの調査料はお払い致しますと、最後につけ加えたたん、部長さんはいかにも事務的に、

「ハ、調査料は売買価格の三パーセントとなります」

えッー 五百万の物件を調べるのに十五マン！ 私はだまって息をのんだ。

「原則として、手前どもは他店の物件の調査だけ、というのはお引きうけ致しますせんす。手前どもでお世話した物件については徹底的に調査致しますが、如何でしょう、手前どもの物件台帳をごらんになつては？」

いんぎん無礼とはこのことだと、私はため息をつきながら、しかし、ここで女の浅知恵をフル回転させたのである。

「あのウ、物は相談でございますが、もし前例を破つてお力をお貸しいただけるんでしたら、自由が丘に移り住んだ後、貯金は一切オタクの銀行とキメますが……」

話はこの一パツで決った。銀行というのは、よくよくガメつくできている。「以後貯金は一切……」というひとことが、これほどの効果をもつとは知らなかった。

部長さんは、少々お待ちを、といって奥に引つ込まれたあと、今回は異例をもって調査代行

致しましょう、しかも無料、との結論を持って来られたのである。いや、そればかりではない、サトウ君に万事任せてありますので何事もご相談下さいといって紹介されたサトウ君なる人物、しばしうつりと見とれるほどの美男子ではないか。

色白の面長でうれいに満ちた好青年。年の頃は二十七、八か。夢かまぼろしかと私は目のまえがかすむほどの幸運にこおど里したものだ、この時サトウ君の調査した項目は、

1 抵当に入っているかどうか（これは登記所へいって抄本を見れば素人でも分るそうである）

2 区画整理にかかっていないか（これは区役所へいって調べればよいそうだ）

この二点だけである。敷地二十四坪、建坪二十四坪の木造家屋が五百万というのは安いのか、高いのか、こればかりは調査のしようがないとのことであった。

要するに不動産なんでものは、値段があつてないようなもの。ほしいという人がいれば、いくらでだって売れるのであり、公定価格などきめようがないのである。

「おたくの物件の川一つへだてると『奥沢町』という地名になつてこちらは安いです。やっぱり『自由が丘』という町名は、町の名がしられてるから、それだけで値が高いんでしょう。止むをえません」